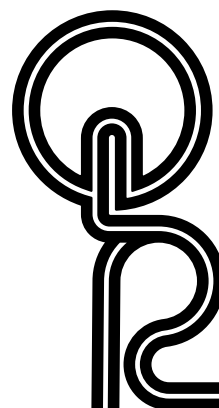


QR Newsletter

第四紀通信

Vol. 10 No.6, 2003



アマゾン川支流マデイラ川と熱帯雨林 .(2003.6.12 久保純子撮影)

Vol. 10 No. 6

December 1, 2003

合同大会・シンポジウム等の案内
..... 2
Field Conference 参加報告 7

幹事会議事録・書籍案内 9
会員消息 10

日本第四紀学会

Japan Association for Quaternary Research

地球惑星科学関連学会 2004 年合同大会（第 1 報）

2004 年合同大会の日程が決まりました。会期が昨年より 4 日間から従来どおり 5 日間となります。また、会期が早まり大型連休最後の日曜日から始まります。日本第四紀学会は、『第四紀』と『活断層と古地震』（共同）のレギュラーセッションを開催するほか、第四紀学関連のスペシャルセッションが多数提案されています。会員各位の発表と多数の参加を期待します。

会期 2004 年 5 月 9 日（日）～ 13 日（木）

会場 幕張メッセ 国際会議場

アブストラク受付 2004 年 1 月 5 日～ 2 月 6 日

詳細は <http://www.epsu.jp/> をご覧ください。

日本第四紀学会ミニシンポジウムのお知らせ

テーマ：「富士火山の最新の知見と防災への応用」

日本で最大の火山である富士山は、1707 年の宝永噴火以来、300 年近くにわたって沈黙を続けています。しかし、最近の観測技術の進歩により、富士山の下でのマグマ活動の様子がわかってきました。また、完新世の詳細な噴火活動史からも現在の火山活動の位置づけが明らかになってきました。さらには、将来の噴火に備えてのハザードマップ作りも積極的に進められています。日本第四紀学会では、富士山に関するこのような最新の地球科学情報とその防災への応用を知っていただくために、富士火山研究の第一線で活躍される 3 名の研究者をお招きして、ミニシンポジウムを開催いたします。皆さま、ぜひ奮ってご参加ください。

講演者：鶴川元雄（防災科学技術研究所 固体地球研究部門）

「富士山の地下で何が起きているか」

宮地直道（日本大学 文理学部地球システム学科）

「富士山の噴火史はどこまで明らかになったか」

小山真人（静岡大学 教育学部地学）

「富士山のハザードマップはどのようにして作られたか」

日時：2004 年 1 月 31 日（土）14:00～17:00（13:30 開場）

場所：東京都千代田区神田駿河台 1 - 1

明治大学駿河台キャンパス 12 号館 10 階 2103 教室

（12 号館はお茶の水駅から駿河台下へ抜ける明大通りに面しています。）

案内図は <http://www.meiji.ac.jp/campus/suruga.html> 参照

問い合わせ先：企画担当幹事 河村 善也（愛知教育大学教育学部）

[yskawamr@aecc.aichi-edu.ac.jp](mailto:ykawamr@aecc.aichi-edu.ac.jp)

海洋調査技術学会第15回研究成果発表会のお知らせ

期 間：2003年11月20日（木）～21日（金）

会 場：海上保安庁海洋情報部7F大会議室（東京都中央区築地5-3-1）

参加費：無料

協 賛：海中海底工学フォーラム、海洋理工学会、（社）国際海洋科学技術協会、地球電磁気・地球惑星圏学会、（社）土木学会、日本海洋学会、日本火山学会、日本写真測量学会、（社）日本水産学会、日本測地学会、日本地質学会、日本地理学会、日本リモートセンシング学会（50音順）

問い合わせ先：

海洋調査技術学会企画委員会

〒104-0045 中央区築地5-3-1（財）日本水路協会内

Tel & Fax 03-3545-6255

URL <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsmst/>

E-mail: jsmst@wwwsoc.nii.ac.jp

19th Himalaya-Karakoram-Tibet Workshopのお知らせ

第19回ヒマラヤ-カラコラム-チベットワークショップの開催をお知らせいたします。本ワークショップはヒマラヤ-チベット地域の地球科学に関する研究発表・情報交換を目的として開催されている唯一の国際集会で、1985年（英国、レスター）以来毎年春に開催されています。第18回ワークショップが2003年3月にスイスのアスコナで開催され、20カ国から約130名の参加者がありました。そのおりに、次回は日本で初めて開催されることが承認されました。日本開催に際しては、地質・層序・岩石・変成作用・地質構造・テクトニクス・第四紀・地質災害などの例年のテーマのほかに、我が国にも関係の深い「ヒマラヤ・チベットの上昇とアジアモンスーン変動」に関する特別セッションも企画しております。

関心をお持ちの方々のご参加をお待ちしております。Pre-registration formを下記ホームページに掲載しております。

日 時：2004年7月10日～12日

場 所：ニセコ東山プリンスホテル（北海道、ニセコ町）

主 催：第19回ヒマラヤ-カラコラム-チベットワークショップ組織委員会

後 援：International Lithosphere Program (ILP)、日本地質学会、日本第四紀学会、東京地学協会、日本構造地質研究会、ニセコ町、北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻

ホームページ：<http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~arita/HKT/index.html>

連絡先：在田一則（北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻、

Tel/fax：011-706-4636、E-mail: arita@ep.sci.hokudai.ac.jp）

北淡活断層シンポジウム2004 「21世紀の世界の巨大地震 / 野島断層からの提言： 地域にとっての文化財とは」

主催：北淡活断層シンポジウム実行委員会（委員長：加藤茂弘，事務局幹事：明元知子）
共催：活断層研究会，兵庫県教育委員会，兵庫県立人と自然の博物館，兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所，北淡町教育委員会
後援：文部科学省，文化庁，兵庫県，北淡町，株式会社ほくだん，日本応用地質学会関西支部（後援団体は予定）

1. 開催場所：兵庫県津名郡北淡町・震災記念公園セミナーハウス
2. 日時：2004年1月10日（土曜日）午後1時から1月11日（日曜日）午後4時30分頃まで
3. 宿泊場所：北淡町自然休養村センター（小型バス送迎）・周辺の民宿（徒歩，希望者のみ）
4. 旅費は発表者，若手研究者に優先支給（要相談）します．一般聴講者は原則自費，科学研究費の関係者はその経費でお願いします．
5. 一般ポスター発表者を公募します【期限：12月20日までに申し込むこと 兵庫県立人と自然の博物館・加藤茂弘宛（katochan@nat-museum.sanda.hyogo.jp），発表要旨は申し込みと同時に送付のこと】
6. 参加希望者【12月20日までに申し込むこと 北淡町教育委員会生涯学習課・明元知子宛もしくは上記の加藤茂弘宛】
7. 予稿集締め切り【期限：12月20日，写真製版用の原稿，メールやフロッピーによる原稿とも兵庫県立人と自然の博物館・加藤茂弘宛（katochan@nat-museum.sanda.hyogo.jp）に】

予稿集原稿はA4サイズで2頁または4頁，第四紀学会予稿集に準拠（上余白：30mm，下余白：35mm，左右余白：25mm，タイトルの前15mm余白，タイトル(ゴチ)，氏名(所属)，英文タイトル，本文は1行漢字35文字，1頁36行を目安とする（第四紀研究40巻1号や会員名簿巻末参照）．

第四紀学会の様式がおわかりにならない方は，原稿はテキストファイルで作成し，メールまたはフロッピーで，図版は割付を指定して加藤茂弘宛に送れば，事務局で第四紀学会予稿集に準拠して作成します．その時1ページは1行35文字，1頁36行を目安に作成してください．図版は原図に限らず，鮮明なコピーを送付して頂くか，pdf もしくはj-peg ファイルにてフロッピー，CD-ROM，ないしMOにて送付ください．2メガバイト未満のデジタル図版であればメールにて送付頂くことも可能です．それ以上の図版は，上記の媒体にて加藤茂弘宛に送付ください．

8. シンポジウム予定（講演者・演題は変更になる場合もあります）

第1日：2004年1月10日（土） 13：00～17：30

・活断層シンポジウム2004 第1部「21世紀の世界の巨大地震」

21世紀に入り，世界各地で巨大地震が頻発しています．中国・アラスカで発生したマグニチュード8クラスの巨大な内陸地震，今年9月に発生した巨大な海溝型地震である十勝沖地震．これら巨大地震の諸相を明らかにするとともに，迫り来る次の巨大地震への備えを考えます．

受付10：00開始，ポスター設置10：00から受付，設置可能

開会あいさつ 井高孝一（北淡町長）13：00～13：10

講演1 内陸の巨大地震に迫る1 中国内陸部の巨大地震と地震断層：林 愛明（静岡大）
13：10～13：40

講演2 内陸の巨大地震に迫る2 インド内陸部の巨大地震と地震断層：中田 高（広島大）
13：40～14：10

質疑・応答 14:10 ~ 14:20

(休憩10分)

講演3 内陸の巨大地震に迫る3 アラスカの巨大地震と地震断層：井上大栄(電力中央研究所)・衣笠善博(東工大)・佃 栄吉(産総研・活断層研究センター)
14:30 ~ 15:00

講演4 2003年9月26日十勝沖地震(M8.0)調査報告：平川一臣(北海道大)
15:00 ~ 15:30

質疑・応答 15:30 ~ 15:40

(休憩10分)

・パネル・ディスカッション：巨大地震・巨大津浪はいつ、どこで発生するのか
その予測と対応 15:50 ~ 17:20

司 会 岡田篤正(京都大)

パネラー 林 愛明(静岡大)・中田 高(広島大)・井上大栄(電力中央研究所)・平川一臣
(北海道大)・島崎邦彦(東大地震研)

閉会あいさつ 加藤茂弘(兵庫県立人と自然の博物館) 17:20 ~ 17:30

・ポスター設置 17:30 ~ 18:00

・懇親会(レストラン「さくら」にて、希望者のみ、参加費3,000円) 18:00 ~ 20:00

・宿泊地へ移動(休養村・その他の民宿) 20:00以降

第2日：2004年1月11日(日) 9:00 ~ 16:30頃まで

・ポスター発表(ポスター設置場所にて見学者に説明) 9:00 ~ 9:50

・活断層シンポジウム2004 第2部「文化財・自然環境情報の発信とその活用」

データベースの構築とその公開・活用は、文化財・自然環境にかかわらず多くの課題を抱えています。構築中のデータベースを例に具体的な問題点を抽出し、解決への方策と有効な活用法を考えます。

講演5 ひょうごヘリテージ情報バンク：魚津知克(大手前大学史学研究所)
10:00 ~ 10:30

講演6 神戸市内の遺跡GISとその活用：魚津知克(大手前大学史学研究所)
10:30 ~ 11:00

講演7 県民参加型の新しい自然環境データベース ひとほくりサーチプロジェクト：
三橋弘宗(兵庫県立人と自然の博物館) 11:00 ~ 11:30

質疑・応答 11:30 ~ 12:00

(昼食休憩) 12:00 ~ 13:00

・活断層シンポジウム2004 第3部「野島断層からの提言：地域にとっての文化財とは」

文化財の多くは地域住民の日常生活から遠い存在になり、居住地域にどんな文化財がどのくらいあるのかすらも、知らないことがあります。地域の文化遺産としての文化財の魅力を見直し、地域住民が誇れる文化財とは何かを探るとともに、複数の文化財を活用できるアイデアを、国指定天然記念物「野島断層」のある北淡町から発信します。

基調講演 文化財と記念物：桂 雄三(文化庁記念物課) 13:00 ~ 13:40

事例報告

講演8 豊岡盆地の記念物群(豊岡市)：池田 啓(兵庫県立コウノトリの郷公園)
13:40 ~ 14:15

講演9 淡路島北部の歴史文化遺産(北淡町)：村上裕道(兵庫県教育委員会文化財室)
14:15 ~ 14:50

(休憩10分)

シンポジウムの案内

- ・パネル・ディスカッション：地域にとっての記念物
総合的な保護と活用 15:00～16:20

司 会 桂 雄三(文化庁記念物課)

パネラー 池田 啓(兵庫県立コウノトリの郷公園)・村上裕道(兵庫県教育委員会文化財室)・
小林文夫(兵庫県立人と自然の博物館)・金津匡伸(日本・モンゴル民族博物館長)・
松田時彦(野島断層活用委員会)・明元知子(北淡町教育委員会生涯学習課)

閉会のあいさつ 境 茂(北淡町教育長) 16:20～16:30

予稿集の送付や発表申込は、兵庫県立人と自然の博物館・加藤茂弘宛(メール・Faxにてお願いいたします)

〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6

電話：079-559-2017, Fax：079-559-2017

E-mail：katochan@nat-museum.sanda.hyogo.jp

メールが上記に届かない際には、下記に送付くださるようお願いいたします。

北淡町教育委員会生涯学習課・明元知子宛

〒656-1736 兵庫県津名郡北淡町小倉177 北淡町震災記念公園セミナーハウス内

電話：0799-82-3400, Fax：0799-82-3401

E-mail：kouen@rhkd254.town.hokudan.hyogo.jp

日本学術会議主催国際会議 「持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議 2003 エネルギーと持続可能な社会のための科学」のお知らせ

期 間：2003年12月16日(火)～19日(金)

会 場：三田共用会議所講堂(東京都港区三田2-1-8)

参加料：無料(事前登録制)

主 催：日本学術会議

共 催：国際科学会議(IUSU)、国連大学(UNU)、国連大学高等研究所(UNU/IAS)

詳しくは以下のホームページをご覧ください。

<http://www.congre.co.jp/ess2003/>

GLOCOPH and IGCP 449 Field Conference, Amazon 2003 参加報告

久保純子(早稲田大学教育学部)

小口 高(東京大学空間情報科学研究センター)

2003年6月12～18日にブラジルのアマゾン川上流域でGLOCOPH (INQUA- Global Commission on Continental Paleohydrology) およびIGCP 449 (Global Correlation of Late Cenozoic Fluvial Deposits) 合同野外研究集会 Field Conference Amazon 2003 が開催された。主催と案内はブラジルのFederal University of GoiasのEdgardo Latrubesseと、State University of MaringaのJose Stevauxである。彼らはGLOCOPHの常連メンバーで、1998年に日本(立正大学)で開催されたGLOCOPH '98や2001年の国際地形学会議(ICG、東京)などにも参加し、大陸河川の古水文研究の分野で活発に活動している。今回の集会はブラジルのベレンで開催されたラテンアメリカ堆積学会のポスト巡検のひとつとしても企画された。

今回の集会の主なテーマは、アマゾン川右支川のマデイラMadeira川、プルスPurus川流域の地形と堆積物、そして年代や堆積環境について論争がおこなわれているソリモエンス層群Solimoes formationに関する現地討論である。巡検ではブラジル西部アクレ州のリオブランコ市Rio Brancoを中心に、幹線道路沿いをバスで移動し、ボートに乗り換えて川沿いの堆積物の露頭をめぐった。行程と主な観察地点は以下の通りである。



マデイラ川上流PacaasNovosの急斜面とトア(手前)
(2003.6.14久保撮影)

の通りである。

6月12日：リオブランコ市とその周辺の地形とアクレ川の洪水、アクレ州連邦大学にてセレモニー(我々は当日夜合流した)

6月13日：リオブランコ～マデイラ川～ポリビア国境Guajara Mirimへバスで移動(約400km)。幹線道路沿いは熱帯林が切り開かれ延々と牧場が続くが、道路沿いに熱帯林が残る部分で林内の様子を観察した。また、哺乳類化石が発見されたという金の採掘地跡では、ラテライト化した段丘堆積物を見学した。ポリビア国境をなすマデイラ川沿いのGuajara Mirimで一泊し、ボートでポリビア側も訪問した。

6月14日：Guajara Mirim東方のPacaas Novos山地の地形と堆積物の観察。先カンブリア界の結晶質基盤岩上に同じく先カンブリア界の砂岩・礫岩層が水平に堆積し、その北麓は急崖が連なり崖下には崖錐が発達する。案内者は急崖の形成を新期断層運動によるものと説明したが、崖錐斜面の下方にペディメント状の緩斜面が続く、結晶質岩のトアや風化殻duricrustがみられることなど、地形形成における時間スケールが変動地域の日本と全く異なり、理解が難しかった。マデイラ川本流の滝(抵抗性の結晶質基盤岩を横切るところ)見学後、リオブランコに戻ったのは22時を過ぎていた。

6月15日：リオブランコから約200km北方のプルス川との合流点Boca do Acreにバスで向かい、そこから小さなボートに分乗し、プルス川上流側で川沿いの堆積物を観察した。プルス川の年最大流量は8000 m³/s程度で、河道は蛇行が著しく、南側には多数の旧河道がみられる。北側はソリモエンス層分布域で、衛星画像などによれば波状の地形が見られた。Boca do Acre泊。

6月16日：ボートでプルス川下流側およびアクレ川沿いの堆積物の観察。河岸に材化石が多量に見られ、¹⁴C年代測定より完新世の河岸侵食・堆積プロセスが研究されていることが説

明された。午後 Boca do Acre 発、リオブランコ帰着。

6月17日：バスでリオブランコ北西約100 kmの Sena Madureira に向かい、ソリモエンス層の観察をおこなう。ソリモエンス層は海成層か陸成層かで Science 紙上で論争となったもので、海成であれば中新世のアマゾン上流域に広大な浅海が出現したこととなる。案内者の Latrubesse らは陸成と主張し、プルス川沿いで見られた現世堆積物との類似を指摘した。陸棲の哺乳類化石を多産することや、アマゾン流域の地形形成史から陸成でもよいように思ったが、微化石等の分析はおこなわれていないとのことであった。

6月18日：ボートでリオブランコ川沿いのソリモエンス層の露頭見学後、昼に巡検は解散となった。午後は Latrubesse が筆者らを初日に見学できなかったアクレ連邦大学古生物教室やリオブランコ周辺の案内をしてくれた。

東京からロサンゼルス経由でサンパウロまで20時間、そこから国内線でマナウス(だいが戻る)ポルトヴェーリョを経てリオブランコまで丸2日くらいかかった。マナウス上空からは幅5 km くらいありそうなアマゾン本流をたっぴり見学できた。そこからポルトヴェーリョを経てリオブランコまでの小型機からの眺めは、見渡す限りの森林の中に、道路に沿って幅1~2 km ほどの牧場がほとんどとぎれることなく続いていた。

アクレ州はブラジルの西端、ペルーとボリビアに国境を接する州で、アマゾンの開発に対する抵抗運動のリーダーで1988年に牧場主らに暗殺されたシコメンデス Chico Mendes の活動地域であり、隣接する Rondônia 州はアマゾン横断道路(トランスアマゾニア)沿いに森林が切り開かれる人工衛星画像で有名なところである。「破壊が進むアマゾンの熱帯林」がみられるかな、という期待もあった。実際は広大な牧場はサバンナのような景観で、ここが熱帯雨林帯の中であることを思い出すのに時間がかかった。しかし、牧場として使えるのは数年間で、決して「持続可能な」やり方ではないとのことである。土地が広大で人工が希薄なアマゾン流域だからこそその開発だったのだろう。

参加者はブラジル各地のほか、アルゼンチ



ソリモエンス層の露頭の観察(2003.6.17 久保撮影)

ン、オーストラリア、イギリス、インド、イタリア、ドイツ、スペイン、アメリカなどからの25名で、日本からは我々2名が参加した。メンバーは河川地形や古水文学の専門のほか、古生物の専門家も含まれた。GLOCOPH のメンバーは何回目かの顔なじみが多く、また、ブラジル国内からは大学院生など若手も参加し、中には久保が1999年の巡検(アラグアイア川上流)に参加したときのメンバーもいた。アラグアイア川の巡検では国立公園管理施設に軍からかりたマットで泊まり、川にはワニやカピバラがいたが、今回は緑色のインコの群れを見た程度で、やはり国立公園以外では野生動物は少ないのであろうか。

マデイラ川はカンボジアのメコン川下流と規模もよく似ており、流量データを見ても最大流量が約5万トンでほとんど同じである。さらに、乾季と雨季の差が非常に明瞭で、河川流量もこれを反映して年間に大きく変化するところも同じである。河床のところどころで基盤岩の露出が見られ、平原の中に滝を形成しているところは、ラオスとカンボジア国境のコーンの滝とそっくりで、大陸の河川とはこういうものかと改めて思った。しかし、案内者らの精力的な活動により、アマゾン流域の環境変遷史の研究が進められていることが理解された。

中・高緯度地域では氷期-間氷期サイクルの環境変遷史の解明が進んだのに比べ、低緯度地域では調査地へのアクセスや研究資料の入手も困難なところが多く、今後いっそうの研究の進展が期待される地域であると思った。

2003年度第2回幹事会議事録

日時：2003年10月25日(土)10:00-12:15
 場所：早稲田大学教育学部16-512演習室
 出席：熊井久雄、真野勝友、山崎晴雄、松浦秀治、
 小野 昭、池原 研、奥村晃史、河村善也、久保
 純子(記録)、中川庸幸(学会センター)
 欠席：斎藤文紀、兵頭政幸

1. 報告事項

庶務：会員動向(7・8・9月分)、受入図書(7機関
 から11冊)、各種案内、学会後援事業(北海道開
 拓記念館特別展)終了報告、特許庁への登録変更
 届の件。
 会計：会誌・会報印刷発行・発送費、海外機関購読
 料の件。
 編集：第四紀研究編集・刊行状況、査読者名公表の
 件、新投稿規定・執筆要項周知の件、INQUA報
 告掲載の件。

渉外：2004年地球惑星科学合同同大会セッション
 登録、自然史学会連合総会・シンポジウム開催の
 件。

企画：ミニシンポジウム準備の件。

2. 審議事項

1)50周年記念事業準備委員会を設置することとし
 た。2)研究委員会の募集をおこなうこととした。3)
 編集書記謝金(給与)を改定した。4)都留文科大に
 保管中の「第四紀研究」の処理について具体案を審
 議した。5)論文賞選考委員候補者選出のスケジュー
 ルを確認した。6)会員名簿の発行(2004年)につ
 いて確認した。7)引用転載許可願(第四紀研究28
 巻、遠藤邦彦ほか論文の図を小田隆則『海岸林をつ
 くれた人々』北斗出版へ)を承認した。8)科研費(研
 究成果公開促進費)を申請することとした。9)新し
 い投稿規定の適用開始を2004年1月1日とした。
 10)ミニシンポジウムの日程とテーマを審議した。
 11)入会案内増刷の件を承認した。

北上山地に日本更新世人類化石を探る - 岩手県大迫町アバクチ・風穴洞穴遺跡の発掘 -

百々幸雄・瀧川 渉・澤田純明 編 B5判420頁 4,200円(消費税込)
 東北大学出版会 ISBN 4-925085-71-9 C3040

日本の更新世人類化石を探るべく結成されたプロジェクトチームが、6年間の歳月をかけて岩手県大迫町の石灰岩洞穴を発掘調査した、その正式研究調査報告書である。人類学、考古学、古生物学の各分野で活躍する研究者たちの飽くなき挑戦の第一歩が記されている。

目次	(澤田純明)
口絵カラー写真	第9節 アバクチ洞穴の完新世小型哺乳類遺体(河村善也)
執筆者一覧	第10節 アバクチ洞穴の後期更新世脊椎動物遺体(河村善也)
はじめに	第11節 アバクチ洞穴の土器(中村良幸)
第1章 発掘調査の目的	第12節 アバクチ洞穴の石器(米倉 薫)
第2章 遺跡の立地条件と環境	第13節 アバクチ洞穴の貝珠(松隈明彦・木下尚子・浜田直人)
第3章 発掘調査の経緯と方法	第5章 風穴洞穴遺跡
第4章 アバクチ洞穴遺跡	第1節 風穴洞穴の層序と遺物の出土状況(阿部祥人)
第1節 アバクチ洞穴内の層序と遺物の出土状況(瀧川 渉・奈良貴史・阿部祥人)	第2節 風穴洞穴第4層の堆積年代に関する予備的分析(松浦秀治・近藤 恵)
第2節 アバクチ洞穴の遺構(瀧川 渉・澤田純明・奈良貴史)	第3節 風穴洞穴の完新世および後期更新世の哺乳類遺体(河村善也)
第3節 アバクチ洞穴の土壌分析(パリノ・サーヴェイ株式会社)	第4節 風穴洞穴の更新世ニホンザルとオオカミ(茂原信生・本郷一美・高井正成)
第4節 アバクチ洞穴の下位堆積物に関する年代分析(松浦秀治・近藤 恵)	第5節 風穴洞穴の土器(中村良幸)
第5節 アバクチ洞穴出土弥生時代幼児人骨(奈良貴史・鈴木敏彦)	第6節 風穴洞穴の石器(渡辺丈彦)
第6節 アバクチ洞穴幼児人骨の年代分析と食性復元(米田 穰)	第6章 総括
第7節 アバクチ洞穴の散乱人骨(瀧川 渉)	
第8節 アバクチ洞穴の完新世動物遺体	

お申し込みは最寄りの書店または東北大学出版会まで
 東北大学出版会
 〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1番1号
 TEL: 022-214-2777 FAX: 022-214-2778
 URL: <http://www.tups.jp> E-mail: info@tups.jp

庶務幹事連絡先訂正のお知らせ

第四紀通信Vol.10, No.5掲載の猿橋賞についてのお知らせの中で、庶務幹事の連絡先（メールアドレス）に誤りがありましたので、以下の通り訂正させていただきます。

（庶務幹事連絡先）

〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学教育学部 久保純子
Tel. 03-5286-1583, Fax. 03-5273-4435, E-mail: sumik@waseda.jp

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。
広報幹事：兵頭政幸(mhyodo@kobe-u.ac.jp)宛にメールでお送り下さい。
第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会

神戸大学内海域環境教育研究センター 兵頭政幸
神戸大学大学教育研究センター 松下まり子
福島大学教育学部 後藤秀昭
編集書記 岩本容子

第四紀学会ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/qr>から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。